〈高校生の部　優秀賞・実行委員会賞〉

除夜の鐘

福井県立武生高等学校　佐竹　菜希

十二月三十一日、二十三時四十五分。紅白歌合戦が終わると同時にダウンを着て、母と一緒に家を出る。うちのお寺に来る人に新年のあいさつをするのは、毎年母と私の仕事だ。

人の煩悩を消し去ると言われる、除夜の鐘。参拝者が来る前の数分間。私はその鐘をつく権利があった。私は撞木についている紐をにぎり、構えた。

ごおん。一度目の鐘が鳴る。

頭が良くなりたいと思っていた。努力しても良い点をとれなくなってから、ずっと。

高校に入ってからの勉強は難しくて、ついていくだけで精一杯だった。どんなにがんばっても敵わない人がたくさんいた。みんなが授業を受けるだけで理解できる内容が、予習も復習もやっていても私には理解できないことがあった。みんなは一回目を通すだけでほとんどの単語を覚えられるのに、私は十回書いても覚えられなかった。悔しかった。みんなにできることが、私にはできなかった。あの天才たちと頭ごと交換できたら、どれほど幸せだろう、と思う。

ごおん、二度目の鐘がなる。

気が利く人になりたいと思っていた。自分が「指示されたこと」しかこなすことができないと気づいたときから、ずっと。

私の同い年の再従姉妹は、よく気が回る子だった。例えば、親戚の集まりがあったとき。彼女は誰にも言われなくても座布団の準備から人数分のお茶くみまで全てこなしてしまう。私はというと、祖父に「おばちゃんのとこ、食べ終わってるから食器下げておいて」といわれてそれだけをこなすのでやっとだった。「気の利く子だねえ。」と彼女がちやほやされて幸せそうに笑っているのを見る度、私もあんなふうになりたいと思っていた。

ごおん。三度目の鐘が鳴る。

常に正しくいられる、強い人になりたかった。いじめられているあの子を助けられなかったときから、ずっと、ずっと。

あの子はいつも一人でいる、静かな子だった。いじめは、ちょっと目立つ女の子たちがストレスのはけ口に、という典型的なものだった。何回かあの子に「大丈夫？」って聞いたけど、いつもあの子は「ありがとう、大丈夫だよ。」と言った。あの子が誰もいないところで泣いているのを知っていた。あの子が大丈夫じゃないのを、私は知っていた。でも、あの子

の「大丈夫」の言葉に甘えて、私は結局卒業までいじめからあの子を救わなかった。私はあの子とたまに話をし、何かをした気になっているただの偽善者だった。いじめに巻きこまれる恐怖心で何もしなかった昔の私が憎かった。助けた方が、あの子も私も、幸せになれていただろうに。

四度目、と構えたときだった。

「明けましておめでとう。」

鐘つき堂の下から、凛とした声がした。目を向けると、あの子だった。「よかったら新年うち来なよ、もてなすから。」と前に家の住所を書いた紙を渡したのを、思いだした。

高校はお互い別だったから、会うのは数ヶ月ぶりだった。中学の時のことを今更ながら謝ると、目の前にいる「あの子」は「君の優しさがあったからめげずにいられた。」と言った。加えて「君は不器用だけど人を思いやれるところがある、見えないところで努力しているのも、私は知っている。」と言った。心が救われた気がした。悩みが全て消え去ったような。「ただちょっと変わっているけど。」とさらに加えられたので、「それは君もだろ。」と言って二人で笑いあった。間違いなく、私は幸せだと言えた。

私は、ずっと幸せになりたかった。幸せは意外と近くにあることに気づかず、ずっとそう思いつづけていた。これからは身近にある幸せをかみしめながら生きていきたい。